

## 日本学術会議第62回総会報告

第62回総会は、10月25～27日の3日間会員210名中それぞれ184、188および175名の出席を得て開かれた。第1日目には、前回総会以後の学術会議の活動全体について報告が行なわれた。これらは、各研連の活動報告とともに出席会員に配布されている。

提案審議は総会2日目から始った。今総会で可決された案件は、勧告3件、要望1件、申入れ1件、声明1件に申し合せ8件の計14件である。総会はずまず民間学術研究機関に対する研究体制確立のための助成の拡大について、また医薬品の臨床試験に関する体制の確立についておよび沖縄の自然保護と文化遺産保存の緊急措置について政府に勧告することにした。沖縄県ではその開発計画および沖縄国際海洋博覧会開催に伴う自然および文化遺産の破壊および西表島の自然保護に緊急措置をとるとともに、これに関する緊急総合基礎調査について具体的な措置をとることを政府に求めることにした。医薬品の臨床試験については従来当該企業側およびその私的に委嘱する医師の判断と責任にその殆がまかせられていた。このような状態は速やかに改善されるべきであって、この勧告では、政府に医薬品臨床試験評価に関する公正なチェックシステムを設け、関連する諸課題の処理につき緊急に適切な措置を講ずることを求めている。この勧告案は強い関心と呼んだが、それとともにチェックシステムの公正を期することの重要性が強調され、この趣旨に沿った修正を可決された。

この勧告は、全国民に直接関り合いをもつものであり、前総会において確認された学術会議の任務、すなわち「科学を産業および国民生活に反映浸透させる」ことの端的な具体化であるといえよう。同様のことは国際環境保全科学会議(仮称)の開催のための準備についての申し合せについてもいえる。すなわち現実の環境破壊に対する対応療法的な対処に止まらず、人間と自然の間に調和のある正しい関係を確立し、これを将来にわたって保持して環境の保全をはかるため、全世界の科学・技術者ベースによる科学的・学際的な討議を行なうことを今期学術会議の仕事として準備することを申し合せたのである。

これらの勧告申し合せの他に、今後の学術会議の活動に関り合いをもつ二つのことが決定された。一つは日本学術会議25年史の編纂であり、他は日本学術会議の広報活動の基本についてである。学術会議がその会議法に示されているように、わが国の科学者の内外に対する代表機関であるならば、国民および科学者一般に学術会議の

活動に関する広報活動を広く展開することは極めて必要なことである。この申し合せは、広報活動のありかたを提示しており、これに基づいて全会員が一層活動することを求めている。

大学改革については、これが日本の学術体制に関わる重要な問題として考えられ、特別委員会を設けて審議が進められているが、今総会ではさしあたり、わが国の大学制度全体に重大な関係がある筑波新大学問題に関しては次期総会までの間その成り行きを注視し、緊急必要な場合には会長が運営審議会の議に基づいて政府に一定の申し入れを行なうことができるようにした。

さらに大学院制度については、その改革を本会議と十分な連絡をとって進めるよう申し入れることにした。

科学技術の平和利用は、学術会議がその発足以来絶えず深い関心を示してきたところであって、この観点に基づいて本総会は、インドシナ地域における破壊的戦争行為について内外の科学者に訴える声明を行なった。また、科学技術庁長官の国防会議参加問題に関連して、わが国の科学技術のあり方について強い懸念を表明するとともに、科学技術平和利用の原則の堅持について政府に要望することとした。これらの問題については種々の意見が活発に交換された。その他いくつかの案件が申し合せされたが、とくに、研究連絡委員会の群別等については引き続き審議することが申し合せられた。

総会に予定された議題の審議を終えてから、日本学術振興会のあり方(試案)について活発な討論が行なわれた。この試案が日本の学術体制上重大な問題を提起するものであるという指摘とともに、この試案に対処するための具体的な政策の検討を行なう必要性が力説された。この結果会長から現在の連審附置学振小委員会の機能を強化する旨の見解の表明があった。

その後ひき続いて会長から日中学術交流について所信の表明があった。ここで会長は、事情が許せば本会議の代表を中国に派遣することを含めて、中国科学院を唯一の相手として本格的な学術交流の促進をはかるとともにこれに関する内外の要望については関係委員会に検討を求めるとし、さらに本会議が戦時中のわが国の科学者の態度の深刻な反省を契機として創設されたという伝統を、アジア諸国との学術交流に際してとくに堅持する決意を表明した。最後に沖縄県から参加した5人の科学者を代表して池原貞雄(琉球大学教授)のあいさつがあり、第62回総会は終了した。(日本学術会議広報委員会)